

# Heart の問題：ホーソーンの「クリスマスの宴会」 の 一 研 究

重 山 巖

## I

Hawthorne は、1825 年に Bowdoin College を卒業した後、故郷の古い町 Salem に帰り、以来 12 年にわたる、いわゆる「孤独の時代」といわれる、長い文学修業の時代を過ごしている。この時代のことを、1837 年に大学時代の級友の一人、Longfellow に宛てた手紙の中で、Hawthorne は次のように回想している。

“By some witchcraft or other—for I really cannot assign any reasonable why and wherefore—I have been carried apart from the main current of life, and find it impossible to get back again. Since we last met... ever since that time, I have secluded myself from society; and yet I never meant any such thing, nor dreamed what sort of life I was going to lead. I have made a captive of myself and put me into a dungeon, and now I cannot find the key to let myself out—and if the door were open, I should be almost afraid to come out... but I can assure you... that there is no fate in this world so horrible as to have no share in either its joys or sorrow. For the last ten years, I have not lived, but only dreamed about living.”<sup>1)</sup>

この時代に Hawthorne が味合った孤独の生活は、Randall Stewart が述べているように<sup>2)</sup>、実際はこの手紙で述べられている程のものではなかったであろう。しかしながら、大学に入る以前からの、そして終生変わる

1) Malcolm Cowley (ed.), *The Portable Hawthorne* (New York: The Viking Press, 1948), p. 608.

2) Randall Stewart, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (New York: Yale University Press, 1948), pp. 27-44.

ことのなかった、人間のつくった社会と神の創造された宇宙における人間存在のあるべき姿に関する、彼の基本的な考え方、即ち Hawthorne が *The Spectator*<sup>3)</sup> 紙上に “On Solitude” と題して述べた essay の中に見られる基本的な考え方、

“Man is naturally a sociable being; not formed for himself alone, but destined to bear a part in the great scheme of nature. All his pleasures are heightened, and all his griefs are lessened, by participation. It is only in Society that the full energy of his mind is aroused, and all its powers drawn forth.”<sup>4)</sup>

を考慮に入れると——彼の種々理由は考えられるが<sup>5)</sup> 生来のものとも考えられる孤独癖を考えると、それは彼の人間存在のあるべき理想の姿を述べていると解することが出来るのであるが——この基本的考え方を考慮に入れると、この共に文学を語り合うことの出来る友のいなかった Salem における生活の彼の回想は、彼のこの時代の内的生活、精神生活に於ける孤独感と人間存在のあるべき姿の確信乃至は理想との葛藤を述べているように考えられる。この意味に於いて、この時代の Hawthorne の孤独の生活というものは一つの事実であったということが出来るように思われる。

Hawthorne の作品の大部分、少なくともこの時代に書かれた作品の大部分のものは、“The Devil in Manuscript” の Oberon のように Hawthorne はその多くを焼き捨ててしまっているのだが、現存のこの時代の作品は、上述の点から考えて見ると、この Hawthorne の内的葛藤の産物であり、この内的葛藤を物語るものであると解することが出来よう。

- 3) これは Addison と Steele の *Spectator* をモデルにして書いた Hawthorne の少年時代の週刊新聞である。
- 4) E. Waggenknecht, *Nathaniel Hawthorne: Man & Writer* (New York: Oxford University Press, 1961), p. 80.
- 5) 幼くて父を失い、母方の Manning 家の世話になったこと、又 1813 年足を怪我して二年間家の中に居なければならなかったことが彼の孤独癖の一原因とも考えられる。

無論作者と作品を余りに密着させて解釈、或いは研究することには非常な危険を伴うものではあるが、題材の不足に苦しみ<sup>6)</sup>、己の人生経験の不足を意識し、範とするに足る作家を持たなかった、19世紀に生きた作家 Hawthorne が幼い頃の愛読書、Bunyan や Spenser の作品にその範を求めた事実を考えると、彼の作品、少なくともこの時代の作品の多くは、彼の内的葛藤の産物であり、又この内的葛藤を物語るものであると考えても、Hawthorne の作品を誤って解釈する危険性は非常に少ないように思われる。

先に引用した人間存在のあるべき姿に関する Hawthorne の基本的な考え方は、“Wakefield”に於いては次の様に表現されている。

“Amid the seeming confusion of our mysterious world, individuals are so nicely adjusted to a system, and systems to one another and to a whole, that, by stepping aside for a moment, a man exposes himself to a fearful risk of losing his place forever. Like Wakefield, he may become, as it were, the Outcast of the Universe.”<sup>7)</sup>

このやや didactic な “moral” は、その前半は、人間存在を有機的に捉らえている点では、先の彼の基本的考え方と同じであるということが出来る。しかし、その後半は、己の孤独の生活と、“Wakefield”のモデルとなった “anecdote”<sup>8)</sup>の中に書かれた人間の奇行に見出した、極めて不安

6) 先に引用した Longfellow に宛てた手紙の中で次のように Hawthorne は書いている。

“...but there has been no warmth of approbation, ...I have another difficulty, in the lack of materials; ...” (Italics are mine.) (M. Cowley (ed.), *op. cit.*, p. 609.)

7) *Ibid.*, p. 147.

8) Hawthorne は只 “in some old magazine or newspaper” といっているが、実際は “William King's Political and Literary Anecdotes of His Own Time (1819, pp. 237-245) からヒントを得たようである。Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: An Introduction & Interpretation*. (New York: Barnes & Noble, Inc., 1961), p. 38.

定な、いつ何時孤独・孤立に落ち入るかもしれない、人間存在の現実の姿というものを表現しているものと解することが出来る。

この孤立, isolation と, isolation を antithesis とすれば, その thesis, participation の二つが, Hawthorne の内的生活に於いて葛藤を演じていたのである。そして彼の作品に於いても, 殆んど総べての作品に於いて, isolation が前面に押し出され, participation はその背景に押しやられていくものであるが, この二つのものが矢張り同様に葛藤を演じているのであって, この isolation と participation という二つの相対立するものは, Hawthorne の作品全体を考える時, 二つではなく, 実際は一つの主要な theme, 主要な theme の一つであるように思われる。従って, この isolation と participation は Hawthorne の作品を研究する場合, 一つの重要な解決しなければならない重要な問題であるということが出来よう。

しかしながら, この isolation と participation の問題は, Maurice Beebe がその著 *Ivory Towers & Sacred Founts: The Artist as Hero in Fiction from Goethe to Joyce* で述べていること<sup>9)</sup>から考えられるように, 芸術家に共通の問題であって, Hawthorne だけに限った問題ではない。Hawthorne の特異性というものは, 19 世紀に生きた Hawthorne が, isolation と participation の問題を heart の問題として捉え, allegorical な手法を用いて作品を書いたという点にあると思う。

ここでは, Hawthorne がその「孤独の生活」から解放され, 妻 Sophea Peabody と幸福な結婚生活を送った「旧牧師館時代」(1842-1845) に, 決局実現されるまでには至らなかったが, “Allegories of the Heart” という短篇集に収められるはずだった “The Christmas Banquet” という短

9) Maurice Beebe, *Ivory Towers and Sacred Founts: The Artist as Hero in Fiction from Goethe to Joyce* (New York: University Press, 1964), pp. 3-18.

篇を取り上げて、この isolation と participation という問題を heart の問題として Hawthorne はどのように捉え、どのような手法で表現したかという問題を考えて見たい。

## II

“The Christmas Banquet” という短篇は、三人の登場人物の一人、Roderick が他の二人、Rosina と彫刻家に自分の創作を話して聞かせるという形式をとった物語である。その構成は三つの部分からなりたっている。第一部では、Roderick が聞き手、Rosina と彫刻家に、自分のこれから物語ろうとする話の中に登場する主人公に関する簡単ではあるが、実に巧に計算された説明がなされている。第二部は Roderick の話で、第三部では、聞き手、Rosina と彫刻家の Roderick の話に対する簡単な批評がなされている。

第一部は、Roderick に、彫刻家も含めて Rosina に、“...but do not anticipate any further illumination from what I am about to read.” といわせることによって、完全な第三者、傍観者の立場に置いた二人に対する導入の役割を果たしている。それは同時に読者に対する導入でもある訳である。作品の中に読者と立場を同じくする人物を登場させることによって、読者に臨場感を与える、と同時に読者を物語の世界に容易に引き入れる一つの常套手段である。言葉を換えれば、Hawthorne が Roderick の創作として物語ろうとする己の創作の世界に読者を誘う一つの手法である。

しかしながら、第一部の果たすこの作品に於ける役割をこれだけと考えたら、それは極く皮相的な考えといわざるを得ないだろう。Hawthorne がこの “The Christmas Banquet” という作品を物語の中に物語とした真の意図は、無論上に述べたことも考慮に入れたであろうが、別にあった

のではないかと考えられる。この作品は、仮に第一部と第三部とがなかったとしても、失われる処も大きいが又十分に一個の作品として存在し得るものであると思われる。それならばどうして Hawthorne はこういう形式を採用したのであろうか。

それは *The Scarlet Letter* の序文, “The Custom-House” の中で, Hawthorne が述べている, 自分の描く世界, 例の “the Actual” と “the Imaginary” とが交錯し合う “a neutral territory”<sup>10)</sup> の位置づけを, 第一部と第三部といういわば reality の世界を “The Christmas Banquet” の中に入れることによって目論んだと考えることが出来るかもしれない。しかし, こういった説明は, Hawthorne の作品全体と考える時には, 十分成立し得るものであるが, Hawthorne がこの作品を書き, 又 “Allegories of the Heart” を出版しようと計画した時点に於ける, Hawthorne の真の意図を説明し得るものではないと考えられる。即ち明白な時間的矛盾があるからである。“The Custom-House” が書かれたのはまだまだ先のことであるからである。

私は次のように考える。それは “The Christmas Banquet” をその一篇としようとした短篇集のタイトル “Allegories of the Heart” から分るように, Hawthorne の描こうとしているのは heart の世界であるということである。“The Christmas Banquet” という作品は総べて Hawthorne の創作ではあるが, Hawthorne がこの作品に於いて描こうとしているのは, 第一部や第三部の世界でないということである。ということは, 第一部と第三部の世界, 現実の世界で起こる isolation と participation

10) R. H. Pearce (ed.), *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne Volume I. The Scarlet Letter* (Ohio State University Press, 1992) p. 36. “Thus, therefore, the floor of our familiar room has become a neutral territory, somewhere between the real world and fairy-land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other.” (Italics are mine.)

の問題を、Hawthorne が heart の問題として捉え、表出していることを示すものであるということである。これが Hawthorne が “The Christmas Banquet” を物語の中の物語という形式にした真の意図であろうと私は考える。

こういう意図の上に立って、Hawthorne は、Roderick の口を借りて、第一部で上に述べた導入と同時にこの物語の主人公の説明、作品全体から見ると、巧みに計算された説明を行なっていると考えられる。

第三部では、第一部で完全に第三者、即ち読者と同じ立場に於かれた、Rosina と彫刻家に、二つの型の読者の代表として、Roderick の物語に対する批評を Hawthorne はさせている。しかしその批評も矢張り Hawthorne の創作であるということを考えると、そこに又別の意図というものがあつたということが考えられなければならないだろう。一般的にいうと、こういう形式をとった作者は、聞き手の一人、或いは複数の聞き手、或いは全部の聞き手に、作者の本当にいわんとしていることを、補足する意味で、明確に或いは漠然と語らせるか、或いは、聞き手一人一人にそれぞれ作者の意図することとは全然逆のことを喋らせること等をなし得る訳である。いずれの場合も物語の中の物語に validity を与える一つの手法である。この第三部で、Hawthorne は先に述べた heart の世界から読者を現実に戻す、と同時に第二部の物語に validity を与えようとしているのである。

Roderick が Rosina と彫刻家の二人に語る話というのは大体次の通りである。

或る風変りな老人の遺産と遺言により、毎年クリスマスに、この世でも惨めな人間が 10 人選ばれて宴会が催されることになる。その基金の監

理人であると同時に、宴会へ招待する人間を選考し、且つ宴会を運営する人として二人の人が決められている。宴会場は、死んだ老人の意を汲んで、“death in life” と “death” を表象するもので飾り付けられている。テーブルの上手には、黒衣の中から突き出した手に、死を表象する “cypress” の花環を高く掲げた、骸骨が坐っている。

第一回目の宴会が催され、その時数人の出席者が “What means that wreath?” と聞くと、監理人の一人が次のように答える。

“It is a crown, not for the worthiest, but for the wofulest, when he shall prove his claim to it.”<sup>11)</sup>

会場には、種々な悩み、心に痛手を負った人々が招待されている。その中に只一人、何処かよその楽しいクリスマス・パーティーに出席した方が似合しいような青年がいる。これが第一部で Roderick が

“I have here imagined such a man to be—what, probably, he never is—conscious of the deficiency in his spiritual organization. Methinks the result would be a sense of cold unreality wherewith he would go shivering through the world, longing to exchange his load of ice for any burden of real grief that fate could fling upon a human being.”<sup>12)</sup>

と語った主人公 Gervayse Hastings その人である。他の客達は彼に気付き騒ぎ出す。その一人は、“He comes to mock us...” と言って、彼を非難する。客の一人 “idiot” は彼に近付き、握手を求めるが、直にその手を引込めてしまう。青年の手は氷のように冷かったのである。しかし監理人に宥められて、ともかくこの青年を加えて宴会は始められる。宴会中、出席者達は人間の不幸、取分け各々自分自身の不幸を語り合うが、決局青

11) Hyatt H. Waggoner (ed.), *Nathaniel Hawthorne: Selected Tales & Sketches* (New York: Rinehart & Co., Inc. 1959), p. 225.

12) *Ibid.*, p. 223.



年は何一つ理解出来ずに終わってしまう。出席者の一人“misanthropist”には、彼の会話が他のものより冷たくはあるが、苦悩の後が感ぜられないため、次のように極め付けられてしまう。

“Sir, pray do not address me again. We have no right to talk together. Our minds have nothing in common. By what claim you appear at this banquet I cannot guess; but methinks, to a man who could say what you have just now said, my companions and myself must seem no more than shadows flickering on the wall. And precisely such a shadow are you to us.”<sup>13)</sup>

こうして第一回の宴会は終わる。

次の宴会までの間、他の同席者であった者達の眼に Gervayse Hastings が愉快的幸福な人間達と一緒にいるのがとまる。

翌年の第二回目の宴会にも、二組の男女を含めて、前回と同じ様な人々が招待されて来ている。無論その中に Gervayse Hastings の姿も見られる。この時も彼は前回同様他の不幸な人間の話を理解出来ない。宴会の最中に、客の一人の突然の死を目撃しても、他の出席者達の驚きも悲しみもともに出来ない。

このようにして宴会は数十年間続けられる。その間、年と共に青年から成人そして老人と変わって行く Hastings は、毎年この宴会に顔を出し、同じような状態を続けて行く。

最後に、この Roderick の話の中で扱われる三回の宴会の場面の最後の場面が述べられる。

長年にわたって出席し続けて来た Hastings は己の席、テーブルの上手の骸骨の正面の座に、当然の権利のように坐っている。この時になって彼は始めて自分が一番不幸な人間であるということを明らかにする。彼は次

13) *Ibid.*, p. 229.

のように説明している。

“You will not understand it. None have understood it—not even those who experience the like. *It is a chilliness—a want of earnestness—a feeling as if what should be my heart were a thing of vapor—a haunting perception of unreality!* Thus seeming to possess all that other men have—all that men aim at—I have really possessed nothing, neither joy nor griefs. All things, all persons . . . have been like shadows flickering on the wall. It was so with my wife and children—with those who seemed my friends: it is so with yourselves, whom I see now before me. *Neither have I myself any real existence, but am a shadow like the rest.*”<sup>14)</sup>

彼の heart は “vaper” のようなものであって、喜びも悲しみも感じない。世間的には富も地位も名誉も又家庭も、人の目から見れば望ましいものは総べて持っているが、それは無に等しい。人も事物も皆総べて壁に揺らぐ shadow のようなものに過ぎず、彼も又同様に実体のない shadow に過ぎないというのである。

そして未来のことを聞かれて、

“Worse than with you, for I cannot conceive it earnestly enough to feel either hope or fear. Mine—mine is the wretchedness! *This cold heart—this unreal heart! Ah! it grows colder still.*”<sup>15)</sup>

と答えた時、テーブルの上座に坐っていた骸骨は崩れ落ち、“cypress”の花環はテーブルの上に落ちた。決局この花環は彼 Hastings のものだった訳である。同席者がその落ちた花環から Hasting の方に眼を向けると、彼は或る変化を蒙ってしまっていて、その影は壁に揺らめくのを止めていた。

14) *Ibid.*, p. 240. (Italics are mine.)

15) *Loc. cit.* (Italics are mine.)

ここで Roderick の話は終わっている。

Hawthorne が Longfellow に宛てた、先に引用した手紙の中で、

“... there is no fate in this world so horrible as to have no share in either its joys or sorrows.”<sup>16)</sup>

と述べているように、Hawthorne の眼から見れば、喜びも悲しみも感じることが出来ない人間程本当に不幸で惨めな人間はないということであった。まさしく Gervayse Hastings というのはそういった恐ろしい運命を背負った人間であった訳である。この何十年にわたって催されたクリスマスの宴会上に姿を現わした多くの、いわゆる「不幸な人々」というのは、Gervayse Hastings を除いて、Hawthorne の眼から見れば、真の意味で不幸な人間ではなく、あの“cypress”の花環の冠を受けるふさわしい最も悲惨な人間ではなかった訳である。

このいわゆる「不幸な人々」は、それぞれ己の不幸や悲しみを感ずることが出来、機会があれば喜ぶことも出来、又宴会場でお互いに己の不幸や悲しみや不幸を話し合い、仲間の急死を目の当りに見て、驚き悲しんだように、彼等は他人の不幸や悲しみを感ずることが出来る heart を、Hastings とは違って、持っていたのである。

彼等の現在の不幸は、彼等の人生のある時期に於ける失敗がもたらしたものであって、もし成功していれば、彼等の人生は逆に幸福であり得たのであり、将来も Hastings と異なり、彼等には幸福になる可能性も残されているかも知れないのである。というのは、彼等は、己れの不幸なるが故に、社会に背を向けた暮しを送っているが、その実孤立している訳ではな

---

16) M. Cowley (ed.), *op. cit.*, p. 608.

く、彼等はおも “the ordinary allotment of reality”<sup>17)</sup> 持っているのである。彼等は Ethan Brand が “Unpardonable Sin” を追求する余りに、遂に断ち切ってしまうことになった “the magnetic chain of humanity”<sup>18)</sup> をその heart のうちに保持しているのである。彼等はおもそれぞれ “a brother-man” であった訳である。

彼等は宴会場に於いてもいわば一種の仲間、Hastings を除いた同胞である。彼等は人間のさまざまな不幸を代表する者として、己れの不幸をそれぞれ会話の主題とし、己れが苦悩の点で一番まさっていることを証明しようとして汲々としているが<sup>19)</sup>、Hawthorne が satirical に表現しているように、彼等は皆一応に “aristocracy of the wretchedness” なのである。この “aristocracy of the wretchedness” というのが、一見孤立しているように見えるいわゆる「不幸な人間」の heart の中に、isolation と participation の問題を heart の問題として扱おうとした Hawthorne の見出した現実の姿、共通の特性なのである。

この “aristocracy of the wretchedness” であるということ、“heart” を持っているということ、そこに “the ordinary allotment of reality” を持っていることにより、彼等は誰一人として “cypress” の冠を受けるに値する本当に惨じめな人間ではなかったのである。

- 
- 17) H. H. Waggoner (ed.), pp. 229-230. “Now and then, however, during the year that ensued, these melancholy people caught glimpses of one another, transient, indeed, but enough to prove that *they walked the earth with the ordinary allotment of reality.*” (Italics are mine.)
- 18) *Ibid.*, p. 214. “But where was the heart? That, indeed, had withered, —had contracted,—had hardened,—had perished! It had ceased to partake of the universal throb. *He had lost his hold of the magnetic chain of humanity. He was no longer a brother-man, . . .*” (Italics are mine.)
- 19) *Ibid.*, p. 228. “The majority of the guests, as is the custom with people thoroughly and profoundly sick at heart, were anxious to make their own woes the theme of discussion, and prove themselves most excellent in anguish.”

一方、Gerwayse Hartings は彼等と根本的に異質の存在であって、次元の異なる世界の住人、丁度 “wakefield” にみた “another being in another world”<sup>20)</sup> である。当然の事ながら、彼には己の喜びと悲しみのみならず他人の喜びと悲しみを感ずることの出来る heart がないたため、従って “the original allotment of reality” を保持していないため、彼は “aristocracy of the wretchedness” に属し得ないし、又属してもいない。宴会の他の出席者にとっては、第一回の宴会の場面でその一人が述べていたように、彼は壁に揺らぐ shadow に過ぎない。又日常生活に於いても、大衆にとっては彼は “a cold abstraction”<sup>21)</sup> に過ぎず、知人や彼の妻子にとってさえ彼は shadow, いわば他人でしかなかったのである。Hastings の方から見ても、彼の周囲のものは総べて shadow に過ぎなかったのである。つまり彼は完全な isolation の状態にあったということが出来る。“Wakefield” に於いて孤立した人間というものは、人間社会に於ける生得の場所を失った人間、或いは “the Outcast of the Universe” と考えた Hawthorne は、ここでは喜びや悲しみを感ずることが出来る heart のない人間と考えていると解することが出来る訳だが、このことだけから考えても、彼は一番不幸な人間であったといいい得るのである。その上更に、己れの heart の欠陥に気付き、その heart の冷たさに人知れず悩み、日常生活に於ける人との交わり、或いは宴会に出席することにより、喜び、たとえそれが悲しみでも、何にか己れの heart を温めてくれるもの、<sup>22)</sup> 即

20) 拙稿：“Another Being in Another World: An Experimental Interpretation of Hawthorne’s ‘Wakefield’” 立正学園女子短期大学「研究紀要」第8集 1964. pp. 22-34.

21) H. H. Waggoner (ed.), *op. cit.*, p. 236. “To the public he was a cold abstraction, wholly destitute of those rich hues of personality, that living warmth, and the peculiar faculty of stamping his own heart’s impression on a multitude of hearts by which the people recognize their favorites.” (Italics are mine.)

22) *Ibid.*, pp. 236-237. “He, too, occasionally appeared not unconscious of the chillness of his moral atmosphere, and willing, if it might be so, to warm himself at a kindly fire.”

ち彼を isolation から participation に導く唯一の「鍵」を求めたが、決局日常生活に於いても<sup>23)</sup>、宴会場に於いても<sup>24)</sup>、得られなかったし、将来に於いても殆んど絶対に得られることはなかろうという事実が加わって、あの 'cypress' の冠を受けるに相応しい最も惨めな人間であるということが立証された訳である。しかし、何にも感ずることが出来ない heart を持った人間が、実際はそのことを一番悩む heart を持った人間であったということはどういうことだろうか。

ところで Hawthorne は、“The Christmas Banquet” に於いて、Hastings の heart とその existence を表象するものとして、それぞれ marble と vaper の image を使用している。

vaper の image は Hastings の heart を表象するものとして使用されているのだが、第一部で Roderick が Rosina と彫刻家に述べた言葉<sup>25)</sup>——これは語り手 Roderick の、つまり Hawthorne の計算であるが——その言葉と、Hastings が最後に “a change” を受けて、その影は壁に揺らなくなっていたという表現から、vaper の image は Hastings の existence を表象するものと使用されていると考える訳である。この最後の描写は極めて ambiguous だが、Hawthorne が Hastings の告白の前に、

23) *Ibid.*, d. 237. “As the hoarfrost began to gather on him his wife went to her grave, and was doubtless warmer there; his children either died or were scattered to different homes of their own; and old Gervayse Hastings, unscathed by grief—alone, but needing no companionship, continued his steady walk through life, and still on every Christmas day attended at the dismal banquet.”

24) *Ibid.*, p. 234. “Men pass before me like shadows on the wall; their actions, passions, feelings, are flickerings of the light, and they vanish! *Neither the corpse, nor yonder skeleton, nor this old woman's ever-lasting tremor, can give me what I seek.*” (Italics are mine.)

25) *Ibid.*, p. 222. “When at last you come close to him you find him chill and unsubstantial—a mere vaper.” (Italics are mine.)

“...at the other, wrapped in furs, the withered figure of Gervayse Hastings, stately, calm, and cold, impressing the company with awe, yet so little interesting their sympathy that *he might have vanished him into thin air* without their once exclaiming.”<sup>26)</sup>

と述べていることから、Hastings の existence は vaper のように消えてしまったと解される。しかしそれが Hastings の死を意味するものかどうかは不明である。

Hastings の heart が marble であるというのは、彼の坐っている姿は “a marble statue”<sup>27)</sup> のようであるとか、最後の宴会に現われた時の姿が “...pale high-browed, marble-featured old man”<sup>28)</sup> であるとか、出席者の一人の言葉 “Who is this *impassive* man?”<sup>29)</sup> 等の表現によって示されている。それは Hawthorne が “Egotism, or the Bosom Serpent” の中で次のように述べていることから判断されることである。

“They knew not whether ill health were robbing his spirits of elasticity, or whether a canker of the mind was gradually eating, as such cankers do, from his *moral system* into the *physical frame*, which is but the shadow of the former.”<sup>30)</sup>

即ち Hawthorne は肉体はその人間の精神的構造、heart を現わすものと考えていることから、Hastings の姿を表わす marble という image は、そのまま彼の heart を表わす image となる訳である。そして彼の heart 冷たさと impassivity は marble もつ冷たさと impassivity によって表わされている。

さて、問題は己れの心の冷たさに悩んでいた人の heart は本当に mar-

26) *Ibid.*, pp. 239-240. (Italics are mine.)

27) *Ibid.*, p. 236.

28) *Ibid.*, p. 237.

29) *Ibid.*, p. 235.

30) M. Cowley (ed.), *op. cit.*, p. 150.

ble で出来ていたのだろうかということである。これは第一部で Hawthorne が Roderick に語らせた言葉<sup>31)</sup>の中に窺える Hawthorne の計算、即ち paradox の手法である。この paradox の手法によって。“The Christmas Banquet”の主人公 Gervayse Hastings は本当に自分の heart の冷たさに悩み、苦しんだ heart を持った人間となり得、他の宴会の同席者よりも本当に惨めな人間となり得たのである。

### III

Hawthorne は、“The Christmas Banquet”に於いて、この短篇をその一篇としようとした短篇集のタイトル“Allegories of the Heart”からわかるように、heart を allegorize しようとしたことははっきりしている。しかし、Hawthorne の allegory には彼が範とした Bunyan や Spenser の allegory のもつ平明さ、意味の明白さというものがない。このことは 19 世紀に生きた Hawthorne が Yvor Winters が極め付けたような単なる allegorist<sup>32)</sup>ではないということを実証するものであるが、Hawthorne の allegory は極めて ambiguous で、又幅もあり深みもあるものである。

Hawthorne は“Allegories of the Heart”の出版を計画した旧牧師館

- 
- 31) H. H. Waggoner (ed.), *op. cit.*, p. 223. “I have imagined such a man to be—what, probably, he never is—conscious of the deficiency in his spiritual organization. Methinks the result would be a sense of cold unreality wherewith he would go shivering through the world, longing to exchange his load of ice for any burden of real grief that fate could fling upon a human being.”
- 32) Yvor Winter, *In Defense of Reason* (London: Routledge & Kegan Paul, 1960), pp. 157–158. “*Hawthorne is, then, essentially an allegorist; had he followed the advice of Poe and other well-wishers, contemporary with himself and posthumous, and thrown his allegorizing out the window, it is certain that nothing essential to his genius would have remained.*” (Italics are mine.)



時代 (1842-1845) に、*The American Notebook* の中で heart を洞窟に譬えることが出来るとして次の様に書いている。

The human Heart to be allegorized as a cavern; at the entrance there is sunshine, and flowers growing about it. You step within, but a short distance, and begin to find yourself surrounded with a terrible gloom, and monsters of divers kinds; it seems like Hell itself. You are bewildered, and wander long without hope. At last a light strikes upon you. You peep towards it, and find yourself in a region that seems, in some sort, to reproduce the flowers and sunny beauty of the entrance, but all perfect. These are the depths of the heart, or of human nature, bright and peaceful; the gloom and terror may lie deep; but deeper still is the eternal beauty.<sup>33)</sup>

入口の明るい場所は Adam の墮落以前の世界、Hawthorne の主要な登場人物が孤立する以前に属していた世界、Trollope のように Hawthorne が描きたいと思っていた世界で、その奥の暗い処は罪の世界、Hawthorne が主に描く世界で、その主要人物が属している孤立の世界、そして一番奥の明るい処は罪を通り抜けることにより達することの出来る世界、participation により達することの出来る世界であると考えることが出来る。

この中の暗い世界について、Hawthorne はまた “The Haunted Mind” に於いては次の様に書いている。

“In the depths of every heart there is a tomb and a dungeon, though the lights, the music, and revelry above may cause us to forget their existence, and the buried ones, or prisoners, whom they hide. But sometimes, and oftenest at midnight, these dark receptacles are flung wide open. In an hour like this, when the mind has a passive sensibility, but no active strength: when the imagination is a mirror, imparting vividness to all ideas, without

33) M. Cowley (ed.), *op. cit.*, p. 564.

the power of selecting or controlling them; . . .”<sup>34)</sup>

上述の heart の暗黒の世界は “a tomb” 或いは “a dungeon” で表現されている訳だが、“The Christmas Banquet” に於ける宴会場はまさしくこの heart の暗黒の世界、‘a tomb’, “a dungeon” であって、Gervaise Hastings は Hawthorne の imagination の mirror に映し出されたこの暗黒の世界の住人であった。そしてその限りに於いては Hastings は Hawthorne が第一部で Roderick に、“. . . this man, this class of men, is a hopeless puzzle.<sup>35)</sup>” とか、或いは第三部で彫刻家に “. . . it is difficult to conceive how they came to exist here, or what there is in them capable of existence hereafter. They seem to be on the outside of everything; and nothing wearies the soul more than an attempt to comprehend them within its grasp.”<sup>36)</sup> とか語らせた人物でしかあり得なかった。人間としての幅も深みも、また温みもない存在でしかあり得なかった。

しかしながら、己れの heart が冷たい marble の heart であるということに悩んでいた heart を持っていたという paradox により、Hastings は、只単にあの “cypress” の花環の冠を受けるに相応しい一番惨めな人間たり得たということだけではなく、この paradox により逆に Hastings は宴会の他の如何なる出席者よりも一番人間らしい存在となり得、一番 heart の一番奥の “eternal beauty” の世界に近い、或いはそこに達し得る人物となっているのである。Hastings には、その冷たさとは逆に、Hawthorne が “Three Fold Destiny” という初期の物語の序に於いて、

34) Agnes Donohue (ed.), *A Casebook on the Hawthorne Question* (New York : Thomas Y. Crowell Co., 1963), pp. 4-5. (Italics are mine.)

35) H. H. Waggoner (ed.), *op. cit.*, p. 222.

36) *Ibid.*, p. 241.

“...rather than a story of events claiming to be real, it may be considered as an allegory, such as the writers of the last century would have expressed in the shape of an Eastern tale, but to which *I have endeavoured to give a more life-like warmth than could be infused into those fanciful productions.*”<sup>37)</sup>

と述べた “a more life-like warmth” が感ぜられる。又 Pascal は *Pensees* の中で「人間の偉大は彼が自己の悲慘を知っている点で偉大である... 自己の悲慘を知るのは悲慘なことであるが、人は悲慘であると知るのは偉大なことである」と述べているが、己れの heart の冷たさに悩んだ Hastings に人間の偉大さというものも感ぜられる。

isolation と participation の問題を heart の問題として扱った Hawthorne は、この “The Christmas Banquet” に於いて、marble の heart を持っていることを悩む heart を持っている人物 Gervayse Hastings という人物を創造し、その話を Roderick にさせ、そこに計算された paradox によって「allegory の類型的人物」から Gervayse Hastings を脱却させ、「一種の human dignity」<sup>38)</sup> を Hastings に与え、人間は精神的に苦悩する時が一番 real に近いということ、言葉を換えれば isolation から participation に至る、いわば一種の salvation というものを、非常に小さな声ではあるが、述べているようである。<sup>39)</sup>

37) James K. Folsom, *Man's Accidents & God's Purposes: Multiplicity in Hawthorne's Fiction* (New Haven, Conn: College & University Press, 1963), p. 74. (Italics are mine.)

38) 小山敏三郎, 「Hawthorne の短篇におけるテーマと手法の展開」, 青山学院大学部第二部英文学会 “Language & Literature,” January, 1956. p. 42.

39) F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art & Expression in the Age of Emerson & Whitman* (New York: Oxford University Press, 1960) p. 341. “Hawthorne's belief in dramatic reality of the issues of conscience can also be phrased most concisely in Eliot's statement, in *After Strange God*, that in moments of intense ‘moral and spiritual struggle... men and women come nearest to being real.’ In no conviction are the novelist and the poet more akin.”

BIBLIOGRAPHY

- Maurice Beebe: *Ivory Towers & Sacred Founts: The Artist as Hero in Fiction from Goethe to Joyce*. New York: New York University Press, 1964.
- Malcolm Cowley (ed.): *The Portable Hawthorne*. New York: The Viking Press, 1948.
- 小山敏三郎: 「Hawthorne の短篇に於けるテーマと手法の展開」 “Language & Literature” January, 1956. 青山学院大学文学部第二部英文学会。
- James K. Folsom. *Man's Accidents & God's Purposes: Multiplicity in Hawthorne's Fiction*. New York: College & University Press, 1963.
- F. O. Matthiessen. *American Renaissance: Art & Expression in the Age of Emerson & Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- R. H. Pearce (ed.). *The Scarlet Letter*. (The Centenary Edition of Nathaniel Hawthorne: Volume I). Ohio State University Press, 1962.
- Randal Stewart. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*. New Haven: Yale University Press, 1948.
- Arlin Turner. *Nathaniel Hawthorne: An Introduction and Interpretation*. New York: Barnes & Noble, Inc., 1961.
- Edward Wagenknecht. *Nathaniel Hawthorne: Man & Writer*. New York: Oxford University Press, 1961.
- Hyatt H. Waggoner. (ed.). *Nathaniel Hawthorne: Selected Tales & Sketches*. New York: Rinehart & Co., Inc., 1959.
- Yvor Winters. *In Defense of Reason*. London: Routledge & Kegan Paul, 1960.
- Agnes Donohue (ed.). *A Casebook on the Hawthorne Question*. New York: Thomas Y. Crowell Co., 1963.
- パスカル: 「パンセ」由木康訳, 白水社